



ひづい
ついで

牛歩七十年

河竹繁俊



ひづい
牛歩七十年

定価 五〇〇円

昭和三十五年四月二十五日印刷

昭和三十五年四月二十八日発行

著者 河竹 繁俊

発行者 柚 登美枝

印刷 猪瀬印刷株式会社

製本 荒木製本所

発行所 株式会社 新樹社

東京都文京区高田老松町二
電話 帥二一〇三番
振替東京 五五七一九番

はしがき

わたくしは丑(牛)どし生まれである。ふりかえって見ると、七十年の生涯を、牛のように歩みつづけてきたように思う。そこで、「牛歩七十年」と息子の考えてくれた題がピッタリとあてはまるので、そのまま書名とすることにした。

牛は見るからに鈍重で、のろのろしている。何となくパツとしない風貌であり態度である。わたくしには、ときたまパツと発散するようなどころもあるが、根は鈍重で、とても颯爽とした馬(牛)のようなわけにはいかない。何かにつけて、ときどき自分ながら鈍重さを後悔することもあるが、さて持ちまえの気質はどうなるものでもない。

まことに平凡な道を、平凡に、しかしたゆまず牛のように歩きつづけて、ここまで来たことはまぎれもない事実である。そして、いつのまにか古稀といわれる年齢に達してしまった。とりたてて、これというはなばなしの業績もないのに、先輩や同僚や友人がきもいりをしてくれて、演劇博物館が二十五周年をむかえたからとて記念の会を、定年退職になるからといって、また記念の会を催して下さる。何ともありがたいことである。じつはそのたびごとに、かたぐ辞退したのだが、おことわりしきれずに、多数の皆さまから過分のご配慮をいただき、心から深く感謝して

いる。

「陣屋」の熊谷は、十六年は夢だと述懐したが、七十年もやはり夢である。学校をしりぞけば一介の野人となる。熊谷は出家して蓮生となったが、わたくしは時間割の生活から解放されて、多少心さびしくはなるが、ようやくにしてのんびりとした生活を楽しむことができそうだ。早大にはいる前を第一の人生とすれば、早大時代の三十二年間は第二の人生で、これから第三の人生がはじまるのである。牛の歩みは、別の荷物を背にしてまた新しくはじまるわけである。けれどもぶ器用で音痴で、碁も将棋も小唄も知らないものとしては、相かわらずの読書とペンを動かす業に従事するほかはあるまい。

その第三の人生にはいる古稀の記念として、わたくしはこの本をまとめた。これも記念会の皆さまのたまものでありがたく思っている。しかし、何の目的も理くつもまじえない、それこそほんとうの身辺随筆であり、写生文集にすぎない。平凡な人間の生活断片を、求められるがまま、あるがままに綴ったものを集めたのである。風雪に際してかどかどの回想記もあるが、いわば茶の間の雑談にすぎない。したがって文章もまぢまち、重複しているところもある。また、挿入した写真は、これも息子が編集してくれたのだが、版ができてみると、どうも自分にかまけすぎているのだが、そのままにした。どうかお見ゆるしを願いたい。ことに附録とした「名人お静」という、四十数年前の大正七年に、ある雑誌に発表した一篇は、若き日の江戸追慕の思い出。こ

れこそ特別にお見ゆるしを請いたいしろものである。

装本は息子の登志夫がこころみてくれ、本文のカットは山妻の写生帖から借用したものだ。これらもお見ゆるしを願いたい。

なお、出版に関しては、記念会の当事者のおすすめに謝意を表するは元よりだが、編集や出版事務について新樹社の柚登美枝氏にひと方ならぬごめんどろを見ていただいた。附記して深謝の意を表します。

昭和三十五年四月三日

河竹繁俊

目次

はしがき

I

あの頃…………… 3

少年時と芝居…………… 11

信濃の柿…………… 18

なり候か切り候か…………… 23

ヤキ米…………… 26

大物の浦…………… 30

長足法…………… 32

松ぶどう…………… 35

II

黙阿弥伝を書いた頃…………… 63

すがら…………… 41

春の雪…………… 44

しめじ…………… 46

人形のカシラ…………… 49

初春の万歳…………… 52

英語の先生…………… 54

ハレー彗星…………… 55

四十年前の中山晋平…………… 57

荷風断片…………… 66

目次

豊竹山城少掾と掾号	68	震災の記	118
そば湯	74	黙阿弥の八角時計	131
わが友	77	黙阿弥の書斎	135
京舞	80	小団次の金魚鉢	139
近松の二百年忌	83	六寸の鏡餅	142
箸やすめ	89	春掛け	144
そうじゅつ	93	家庭大学講座	149
勸進帳一段だけ	95	ギリギリの駈付け	154
黙阿弥の失敗した妹尾	99	初テレビの記	157
尾上菊之助異説	103	忘られない空襲	160
服装遍歴	107	消えた鉄塔	166
大正六年十月一日	114	待避	169

目次

IV

ういきょう	207	ほととぎす	209
へび	202	小綬鶏	212
わらび	199	関東オナガ	214
りんどう	196	赤松の苗	216
朝顔	194	ウコギ	218
チゴンバナ	191	くすのき	220
ひばり	189	秋海棠	223
地下室	186	ぼけ	226
初冬の富士	184	四季なでしこ	228
懐中時計	182	月桂樹	230
杣	179	立体映画	232
苔水園点描	173	皇居内の園遊会	234

目次

私の健康	241	『日本演劇全史』	261
寒菊	244	早春	266
最終講義	246	『演劇百科大事典』	268
演博三十年の思い出	249		
附録			
名人お静	275	略年譜	343
父の一面	339		

扉カッタ 河竹みつ・附録カッタ 河竹登志夫

I



あの頃

ぼくは、江戸根おいの狂言作者黙阿弥の後嗣ということになっているばかりでなく、歌舞伎について話したり書いたり、研究したりしているの、まぎれもない江戸っ子だと思われることもあるが、じつは信州の山猿である。

長野県もずっと南のほう、伊那節の本場である飯田市から西南へ八キロ、南信の名勝天竜峡から西へ六キロ、その名さえ山本村という山村の、農家の三番小僧として生まれた。明治二十二年（一八八九）六月の、何でも麦の刈り入れどきで、その晩方に、しかも月足らずの小さな赤ん坊だったという。後には五尺七寸、十七貫という、人一倍にせい、だけは高くなったが、中学の三年までは、せいが低くて、いつもピリから二、三番目あたりにいた。どうして身長が伸びたか、あとで述べよう。

言わば中へんの農家だったが、六、七才までは下女も下男もいたし、そのあとになっては養蚕が主になったから、田圃や畑の仕事にはまったくいかなかった。兄弟は五人で、上に兄が二人に姉が一人、舎弟が一人あった。姉が早くに嫁入りしたので、ぼくは女の子代用に家中の掃除や雑

巾がけをさせられた。

小学校にはいったのは、かぞえ年の七才。六月九日生まれたから満六才にもなっていないかった。ふつうは八才で入学だった。かりに入れてあげようということだったらしい。何せ、山村の分教場だったから、学童は二年目ごとにしか入学させなかった。七つで入学しないと、九つまで待たねばならなかったからだ。おまけに尋常科（四年）と補習科の生徒をひっくるめて七、八十人もあったろうが、教場も一つ、先生も一人きりというあわれな状態だったのである。

だから今から思うと、どんなに不完全な教育だったろうかと、そらおそろしい。今もって字がまずくて、音痴なのは、多分そんなためではなからうかと（自分の不心得は棚にあげて）思うことがある。学校にはいった二年目かに、先生が小さな手風琴を買ってきて「君が代」だけを教えてくれた。オルガンもなかった。

しかし、ぼくが物の本にしたしむようになり、それを一生の仕事とするようになったのは、長兄のお蔭だった。長兄市村威人は今も八十三才で郷土史完成のためにいそしんでいるが、これがないへんな読書家だった。その頃出刊されはじめた博文館の帝国文庫は、あらかた購入しており、「小国民」という雑誌もそろえていた。しかし最初にぼくを引きつけたのは、巖谷小波の日本昔噺・日本お伽噺の二大叢書だった。兄は飯田の町へ行くたびに、新刊されたのを取ってきてくれた。それを礼を言うでもなくむさぼり読んだ。ひっくり返しとっくり返し読んだ。各叢書に

は二十四編ずつあったが、その題名を桃太郎・猿蟹合戦・かちかち山・浦島太郎——とすっかり暗記していた。

それから「小国民」。この雑誌は東京中心の小学生目あての編集だったが、近年の「幼年クラブ」のように、いろんな知識を吹きこんでくれた。シェイクスピアだのワシントンだのという名前も、この雑誌で教えられたと思う。だから、ぼくが十九才になって、はじめて汽車というものに乗って東京に出たときも、東京見物をしようと思ったことはない。草深い田舎にいても「小国民」が、あそこもここも案内してくれていたからだった。

小学の課程四年を終わって、他村の高等小学校に進んだ。そうして高等小学の三年生から県立の飯田中学校に入学した。が、それまでには帝国文庫本をかなり読んでいた。馬琴・種彦というところが多かった。西鶴も近松もあったのだが、やはり名の通った八犬伝・弓張月・俠客伝・白縫譚・児雷也・西遊記などに取りついた。夏休みに養蚕の手伝いをしながら八犬伝を読みおわったことは忘れられない。紅葉・露伴・鏡花の小説も長兄の恩沢で読むことができた。「高野聖」は「新小説」の誌上で読んだ。

○

ぼくは卒業に近づくほど成績はあがるほうだったが、小学生、中学生としても、非常に優秀な生徒ではなかった。いつも学業以外の本を読んだからでもあろう。

中学時代には、押川春浪の冒険小説が大いに流行していて、「海底軍艦」「武俠の日本」などというものを讀んだ。三、四年生時代に日露戦争を経過したが、軍人や政治家になろうとは一度も思わなかった。ただ英語が好きだったので、外交官みたいなものになろうかと思つたことがあつて、神田一ツ橋にあつた高等商業学校（いまの一橋大学）を受験したが失敗した。すぐにあきらめて、もともと好きな早稲田の文科に編入試験を受けて入れてもらった。

中学時代の思い出は、居村から飯田までの二里十三丁（約十キロ）を歩いて通学したことだ。ただし試験の前後とか寒い時は、飯田の知人の宅で自炊生活をした。

そのころは電車もバスもなかった。ガタ馬車はあつたが、馬車賃がいるし、通学の役には立たなかつた。自転車で乗るのは、たいへんな金持ちの息子さんだけだつた。人並はずれてちつぽけで、旧性が市村だったので「チョビ市」などと嬉しくないあだなをもらつていたのが、朝に晩に、雨にも風にも、二里十三丁の県道を歩いたことは、思えばかなりの苦難だつたかもしれないが、少しも辛いなどとは思わなかつた。もっとも同じ街道を通学していた友達もあつたからであろう。

はじめは制服・制帽に靴だつたが、ドタ靴では足が痛むので、雑木のヒッキリ下駄というのをはいて歩いた。一カ月に三足ずつすりへつたことをおぼえている。けれども、これは後々の健康のためには大いに役立つたと思う。六十五才の今日まで、きわだつた病氣もせず働いてこられたのも、無我夢中で歩きつづけたことによるのではなからうか。こんにはあまりにも乗物が便

利になりすぎたように思う。わずか一キロのところでも、時間があっても、スクール・バスに乗る——というような傾向がいいかどうか。

もう一つ、せいの低い諸君に告げたい。ぼくはあまりせいひくなので、何とかしてもう少し大きくなりたいと思っていた。すると一年上の級に筒井清治という一風変わった研究家が出て、長足法という小さな稿本を作ったり、校庭でピョンピョンと足を上げたり、せいのびするなどの運動をしていた。ぼくはその人の指導を受け、寝る前に踵をのぼしたり、足を高く上げたりした。果たして、そのご利益かどうかは保証の限りでないが、めきめきと身長がのび出した。四年生のときには、一年間に四寸(十三、四センチ)はたしかに高くなった。そうして中学五年を卒業するころには、五尺七寸余になったのだった。しかしそんなに急に伸びたためかヒョロヒョロになり、長いあいだ神経衰弱になやまされた。あの長足法の筒井は今も健在かどうかしらないが、読者諸君にして必要を感じておられる方はおためし下さい。

○

その当時の早大は、名称こそ大学でも専門学校程度で、予科が一年半、本科が三年という組織になっており、学年のはじめは九月だった。その本科の二年になると、明治四十二年(一九〇九)の四月から、坪内逍遙の主宰する文芸協会に演劇研究所が開設された。

この前後は、明治文学を一変させた自然主義文学の全盛時代で、同時にヘンリック・イブセン